

バーモント・パストラル  
— Frost の詩 "Directive" の読み方 —

John Elder: *Reading the Mountains of Home*

星野 勝利

一編の詩は、日常生活の中で、どのような意味を持ちうるものなのか。詩を味わうということは、どのようなことなのか。詩に関わるこのような基本的問いに、本書は一つの解を提供してくれる。

詩人 Frost は晩年バーモント州にある小さな町 Bristol から数マイル離れたところにある小さな村 Ripton で生活する。この村は、地図で確認する限り、国立公園である Green Mountains の山並みを東南の方向に望み、西の方向には、南北に細長く伸びる Lake Champlain の青い湖水と、ニューヨーク州北部に広がる広大な Adirondack の山並みを、遥かに望むようなところである。小高い丘と青い湖に囲まれた緑の大地というべき土地で、アメリカ大陸北東部ニューイングランド地方の典型的な田園風景を想像させるところである。

カリフォルニア州のサンフランシスコに生まれ、若い頃ロンドンや、バーモント州のすぐ隣のニューハンプシャー州に住んだことのある Frost は、晩年、西隣りにあるこのバーモント州で生活する。この地で書かれた詩に "Directive" という一編がある。詩集 *Steeple Bush* (1946) に収められたもので、62 行の長さを持つやや長い詩である。書き出しは、次のように始まる。

Back out of all this too much for us,  
Back in a time made simple by the loss  
Of detail, burned, dissolved, and broken off  
Like graveyard marble sculpture in the weather,  
There is a house that is no more a house  
Upon a farm that is no more a farm  
And in a town that is no more a town.

詩の内容は、かなり難解である。書き出し部分に見られるのは、風化と喪失の世界、すなわち、かつての町や農場や家屋の痕跡がわずかに認められる

ような、騒々しい日常的世界とはかけ離れたような場所の姿である。この後この詩では、この場所に通じる山道のことがうたわれ、付近の土地の様子のことや、そこで生活した過去の人々のこと、さらには、子どもの遊び場であったと思われる場所のこと、そしてそこに残り残された壊れた一つのガラスのことなどがうたわれる。結びは、読者に向けた、次のような呼びかけである。

Here are your waters and your watering place.  
Drink and be whole again beyond confusion.

この本の著者 Elder は、今から約20年ほど前に、アメリカ西部カリフォルニアから東部ニューイングランド地方の Bristol に移り住むことになったという。第二の故郷として、この地に寄せる著者の思いにはきわめて熱いものがある。この思いは、同じようにアメリカ大陸を西から東へと移動し、しかも同じような場所に住むことになった Frost に対しても向けられる。かねてからその詩に親しんでいた著者は、とりわけこの地で書かれた詩 "Directive" の中に、山の中へ歩み出て見よ、という詩人からのメッセージを聞きとる。それに呼応して、著者は一つの計画を思いつく。この詩と、森林局作製のこの地方の地図を案内役として、実際に山の中へ歩み入ってみよう、というものである。この計画が、どのように実行され、その途上、どのようなことがあり、どのようなことを考えたか、その詳細を語るのが本書である。

本書はいわゆる Nature Writing の一種である。Thoreau が Walden 湖畔での体験を *Walden* の中で詳細に報告したように、本書もまた、Bristol 近郊の二つの山 South Mountain と North Mountain でのほぼ一年間の体験を報告する。1994年の9月23日から翌年7月14日まで、著者は、時には一人で、時には妻と、また時には息子とともに家を出る。山に入り、池を訪れ、川にカヌーを浮かべ、鳥や動物と出会い、草花や樹木を眺める。山肌に露出した岩石を観察し、氷河期以来の地質的变化のことを思う。すなわち本書は、植物学、動物学、博物学、地質学といった多様な領域にわたる自然科学的観察の書でもある。

Nature Writing の中には、このような種類のものは少なくない。しかし本書は、このような科学的観察で完結するという性格のものものではない。詩 "Directive" を案内役として山に入る著者は、山道を歩きつつ、草花や木々を眺めつつ、たえずこの詩を思い浮かべる。時には詩句のことばに触発されて、

山の世界と人間の世界との関わりに思考を向ける。入植の歴史、その生活、炭焼きや樫引きのこと、インディアンとの関係、これらのことが古い資料や村人の話を通して回顧される。同時に、環境問題やドロップアウトした若者の問題など、小さな田舎町が今現在抱えている社会的問題のことも、それと平行して語られる。さらに、敬愛する父の死のこと、その時の不思議な体験、母のこと、妻のこと、息子のこと、その息子との対話のむずかしさなど、著者自身に関わるきわめて個人的なことも、親しい友に打ち明けるかのように淡々と語られる。多様な話題が、飾ることなく、率直に語られているのが、本書の大きな特徴である。

詩 "Directive" は、難解な詩である。その理由は、主として、ことばの象徴性にある。ことば一つ一つの意味、その意味のつながりが、しばしば把握しにくいものとなっているのである。しかし、この詩をたえず思い浮かべる著者は、ことばの一つ一つ、詩句の一つ一つについて、その意味するところを反芻する。その反芻の過程では、Wordsworth の詩 "Michael" との共通性のことを思い、Eliot の *Waste Land* や、Shakespeare の *Tempest* や *A Midsummer Night's Dream* との関係などについても、あれこれ思い巡らす。Marianne Moore や A.C. Ammonds などの現代詩人も、この反芻行為の射程内にある。一編の詩を反芻しつつ、そのことば一つひとつをなぞるように歩む著者は、その行為を通して、端なくもその詩の見事な注解者であることを証明する。この意味で本書は、Frost の詩のすぐれた研究書でもある。

西部から東部に移った著者は、西部の自然が奪われるままであるのに対して、東部 Bristol 近郊のそれは、意外にも今では復元の方向に向かっていることに気づく。そのことを確認しつつ、山々の自然を語り、文明を語り、家族を語り、そして何よりも、そこで生み出された Frost の詩を語る本書は、アメリカ東部ニューイングランドという小宇宙の、過去と現在、そして未来を語る、一個の美しいパストラルである。

詩 "Directive" の末尾近くに、次のような詩行がある。かつて子どもが遊び戯れたと思われる場所を訪れた詩人は、そこにある一本の松の木にも目を向ける。この松の木は、著者によると、日本の能舞台の背景として使われる松の木、すなわち人間界で繰り広げられるさまざまな営みを、その背後で静かに見つめるものとしてのそれを連想させるものであるという。

First there's the children's house of make-believe,  
Some shattered dishes underneath a pine,  
The playthings in the playhouse of the children.

この松の木のように、ニューイングランドの自然の世界をひとり静かに眺める本書の著者は、かつてサバティカルで京都に一時滞在したこともあるという。現在は、Bristol 近郊にある Middleberry College で、学生を相手に環境学の教鞭をとる人である。

(Harvard University Press, 1998, 249pp., \$ 22.95)

(岩手大学教育学部英語教育講座)